SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

A Study of Education Practice in Art : Developing communication skills through color, form, and image

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2019-03-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 大石, 舞子, 芳賀, 正之
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00026374

美術科教育における授業実践研究
—「色・形・イメージを通したコミュニケーション力」の育成—

大石舞子　　芳賀正之

A Study of Educational Practice in Art
: Developing communication skills through color, form, and image

OOISHI Maiko　　HAGA Masayuki

要旨

美術科教育において、これからの社会を生きていく生徒たちに身に付けさせたい力として、「色・形・イメージなど造形的な視点を豊かにもち、他者とコミュニケーションをとる力」があげられる。色、形など様々な造形的な視点を豊かにもつことで、自分の思いやイメージを言葉にして他者に発信すること、また他者と関わることで多様な見方・考え方、価値観を認め合いながら新しいものを創造していく力、他者と協同しながら生きていく力を育成していくことが大切である。それを踏まえ、本題材では表現や鑑賞の学習活動を通して、仲間とのかかわりの中で表現を広げたり深めたりしていくこと、自己を深く見つめ、自分らしい表現を追求することで創造活動の喜びを味わう姿を目指して授業を実践した。本報告では、その内容及び成果等について述べている。

キーワード：　色　形　イメージ　コミュニケーション　抽象　教材開発

1. 研究目的

美術科教育において、これからの社会を生きていく生徒たちに身に付けさせたい力として、「色・形・イメージなど造形的な視点を豊かにもち、他者とコミュニケーションをとる力」が必要であると考える。色、形など様々な造形的な視点を豊かにもち、自分の思いやイメージを言葉にして他者に発信することができ、また他者と多様な見方・考え方、価値観を認め合いながら、新しいものを創造していく力、他者と協同しながら生きていく力を育成していくことが大切だと感じる。コミュニケーションを取る上で、まずは自分の思いやイメージを持った上で、相手とかかわることができるのかが重要である。

表現や鑑賞の学習活動の中で、造形的な見方・考え方を働かせることや他者とかかわり合いながら学ぶことは、生徒たちにとって、生活や社会の中にある色や形など様々な造形要素についての見方・考え方を広げたり深めたりしていくこととなり豊かな生活を送ることにつながる。

本題材では、研究テーマを基に手立てを講じ、表現や鑑賞の学習活動を通して、仲間とのかかわりの中で表現を広げたり深めたりしていくこと、自己を深く見つめ、自分らしい表現を追求することで創造活動の喜びを味わう姿を目指し、授業を実践することとした。

2．研究の手立て

○言語活動を有効的に活用する
○造形的な視点を働かせ発想・構想広げ、創造的な表現を高めていく題材展開
○他者とのかかわりを重視した表現活動と鑑賞活動をつなげる実践

自己の思いやイメージなど表したいことを強く抱き、他者と伝え合うためには、自分の思いを言葉に表すことが必要である。美術科の言語活動には、色や形、イメージといった造形要素を介した言語活動も含まれる。表したいことや表現意図などを他者と言語を通して話し合う経験を積み重ねていくなど、様々な場面で言語活動を有効的に活用することは、コミュニケーション力を育成することにつながると考える。

生徒が心の中に抱いた思いやイメージを表現していく上での手立てとして、必要な場面において形や色彩、構図など造形的な見方・考え方を働かせながら表現を広げたり深めたりしていけるように題材を展開する。造形的な見方・考え方を働かせ、少しずつ知識や技能を習得しながら表現を追求していく中で、生徒自身が自己の変化や学びを実感できるようにしたい。

また、表現活動と鑑賞活動のつながりを意識した題材

を展開する。参考作品として、事前に制作してもらった大学生の作品鑑賞や生徒同士の相互鑑賞により、他者の表現から心情や意図、創造的な表現の工夫などを深く感じ取る鑑賞の能力を育成することや、発想・構想の広がりや深まり、創造的な表現の高まりにつなげたい。

３．授業実践

（１）題材名「～目に見えない大切なもの～
形や色に思いをたくして抽象画で表そう」

（２）対象学年
第２学年（２学級、計４４名）

（３）題材目標

・自己の内面を深く見つめ、目に見えない大切ものを抽象的な形や色彩などを用いて表現することに関心をもち、表現や鑑賞の活動に意欲的に取り組む。（関心・意欲・態度）
・感性や想像力を働かせて、自己の内面を深く見つめ感じ取ったことなどから主題を生み出し、形、色彩、構図の表し方と主題を関連付けながら発想や構想を練る。（発想・構想の能力）
・感性や造形感覚などを働かせて、形、色彩の表し方や技法など、自分の意図に合う表現方法を試行錯誤しながら創造的に表現する。（創造的な技能）
・作者の心情や意図、創造的な表現の工夫を、形や色彩などの造形要素に着目して感じ取り、自分の価値観をもって自他の作品のよさを味わう。（鑑賞の能力）

〔共通事項〕を位置付けた指導のポイント

・言葉からイメージを広げ、形や色彩の特徴や組み合わせ方（構図）などに着目させて、それらの効果を生かした表現を工夫させる。

（４）題材について

抽象絵画や抽象彫刻というと、何が表現されているかよくわからない、深く考えて鑑賞したことがないというのが一般的に多い印象である。生徒にとっても、何の手立ても講じなければ抽象的な表現への理解や自己の内面を抽象的に表現することに対して、難しさや戸惑いを感じてしまうだろう。これまでの自身の実践においても、生徒の内面をどのような題材を通して表現させるのがよいか、抽象的な表現に対する評価は難しいのではないかという悩みから、深い題材研究や積極的な実践を行ってこなかった。

しかし、具象的な表現のみならず、生徒が自己を深く見つめ、感じ取ったことや考えたことを基に主題を生み出し、表したいことを自分なりの色や形にたくして創造的な表現を追求していく経験は、生徒にとって大変価値のあるものだと考える。

中学生の思春期は、自己や他者との関係の中で、様々なことを深く考えながら自己を形成していく時期である。「目に見えない大切なもの」を抽象的に表現することは、自己や他者とのかかわり、過去や未来について考えるなど、自己の内面を深く見つめることが必要不可欠となる。自分の中から主題を生み出し、その意味や価値について深く考えたことを自分の言葉で言語化することで、表したいことを強く抱くことにつなげたい。そして、一人一人の抱いた主題をもとに、言葉からイメージをふくらませ、色、形、構図、表現技法と関連付け、試行錯誤しながら創造的な表現を追求していくことを、本題材の付けたい力とする。本題材を通した学びが、生徒にとって知識や技能の習得だけにとどまらず、他者の多様な価値観や表現にふれることで、互いのよさや個性を認め合うことや表現と鑑賞を繰り返す中で自分らしい表現を追求する学習活動を通して、創造活動の楽しさや喜びを味わうことにつなげたい。

（５）題材展開（１０時間扱い）

1	抽象表現に関心をもつ【鑑賞】 アートカードの抽象作品を、形や色、表現方法などに着目して鑑賞し、作品に題名をつけ、その理由を考える。班ごと発表し、多様な見方・考え方にふれる。
2	「詩」からイメージを広げ、抽象画を描く【発想】 目に見えない言葉「詩」から、思い浮かんだイメージなどをもとに、抽象的な形（線）や色彩を使って表現する。互いのイメージや形や色に込めた意味を鑑賞し合う。
3	抽象的な形の表し方、主題の創出【発想】 前時の作品から形の表し方に着目し、３つの分類を示す。（偶然、単純化、幾何学） 「目に見えない大切なもの」の大切な理由、意味や価値などを考え、主題を言語化する。
4	主題を基に、抽象的な形の表し方や色の効果を試す。【発想】 大学生の作品を使って、形や色彩から伝わってくるイメージを全体で鑑賞し合う。 主題と形の表し方、色の効果を関連付けながら発想・構想を練る。
5	動きのある構図を工夫する。【発想】 動き（躍動感、生命感など）作者の心情が強く伝わってくる作品を鑑賞し、主題と構図を関連付けながら発想・構想を練る。
6	スケッチの相互鑑賞、構想をまとめる。【鑑賞】 アイデアスケッチの相互鑑賞を行い、他者の感じ方や表現の工夫を参考にしながら、構想をまとめ、画用紙に下描きする。

7	色彩の効果や表現技法を試し、意図に合った表現を追求する。【技能】 大学院生の制作風景を鑑賞し、重色、タッチ、グラデーション、水で溶かす、ぼかしなど水彩色鉛筆を用いた表現技法の広がりを感じ取り、意図に合った技法を試しながら制作する。
8 9	表現意図を明確にしながら、色彩や技法の表現を追求する。【技能】 主題と表現意図に着目し、生徒の制作途中の作品を鑑賞し合う。 思いやイメージを強く抱き、形や色、技法への意味付けを明確にしながら、自分なりの表現を追求する。作品完成後、表したいことを基に「詩」をつくる。
10	鑑賞会【鑑賞】 「詩」と絵を関連付け、作者の心情や意図、表現の工夫などを感じ取りながら鑑賞し合う。 抽象画の学習における学びを生徒自身が振り返る。

（6）展開内容と手立ての実践

①第１時

○アートカードを活用し、抽象表現への関心を高める

「抽象表現とはどのようなものか？具象と抽象の違いは何か？」を体験的に感じ取ることを目的に、静岡県立美術館からアートカードを借りて鑑賞活動を行った。

まず導入では、写実的な絵と何が描かれているか想像しなければ分からない絵を比べ（上田薫とモンドリアンの作品鑑賞）、感じたことを発言し合った。モンドリアンの作品を見て、何が描かれているのかを形や色に着目して想像していた。（葉っぱ、木、雨など）

抽象とは、色や形をみただけでは意味が伝わらず、何が描かれているのか想像力を働かせてみるものと定義し、カードを具象作品と抽象作品に分ける活動を行った。抽象作品の中から１枚を選択し、班で題名を考え、その理由を話し合った。班の中で題名を一つにしぼり、形や色にどのような意味があるのかを話し合う班やそれぞれ感じたことが違うことから、４つの題名を付けた班もあった。形や色、表現方法などから作者の心情を想像し、「丸は人間で、線は人同士をつなげる糸ではないか。（見立ての利用）」など、班ごと対話しながら様々な想像をふくらませて作品を深く鑑賞していた。

教科書に載っている抽象作品の鑑賞だけではなく、地域の美術館に所蔵されている作品のアートカードを利用することで、少しでも芸術作品を身近に感じ、本物の作品を鑑賞しに行くきっかけ作りにもつながればと思い実践した。授業の振り返りから、他者とかかわり合いながら鑑賞したことによって、抽象画に対しての関心を高めることや様々な見方や感じ方にふれることにより、想像が広がったという生徒が多かった。

・班の発表を聞いて、自分では思いつかないような考えや似ている考えもあっておもしろかった。具象は一つの決まった絵だけど、抽象の絵は人によって見方が違い、何が描かれているのかを考える以外に、感情や人の思いがつまっているのかを考えて見ることが楽しかった。
・決まった形だけでなく、人の定まっていない感情を不規則な形で表すものもあると思った。「思いのままに描いている」という発表を聞いて、確かに言葉にできない想いを絵にすることはできると感じた。抽象には、作者にしかわからないことを感じ取るおもしろさを感じた。

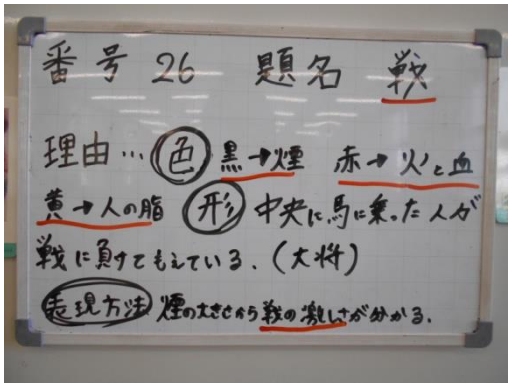


図１　班活動で記述した内容

②第２時

○言葉「詩」からイメージを広げ、抽象的な色や形で表す体験

見えないものを抽象的に表現する最初のステップとして、谷川俊太郎さんの詩からイメージを広げ、言葉から思い浮かんだイメージを形（線）や色で表現する活動を行った。

３つの詩を朗読し、その中から一つを選択して表現する。導入では、大学生の作品を鑑賞し、同じ詩でも色や形には多様な表し方ができることや目に見えないものも抽象的に表すことができそうだという見通しがもてるようにした。どの絵がどの詩を表しているのかを生徒に想像させ、言葉からどのようなイメージを広げているのかを色や形に着目しながら鑑賞した。生徒は互いにどのような表現をしているのかを見合ったり自分の色や形にはどんな意味があるのかなど対話したりしながら表現していた。色鉛筆という扱いやすい描画材を使ったことで、短時間でもそれぞれのイメージを形や色で表現することができたと感じる。班や全体で鑑賞し合うことで、言葉から広がるイメージがそれぞれ違うことや、抽象的な表現にも多様な表し方があり、人それぞれの個性が表れていることに気付かせる表現活動となった。

・線や色だけで思いを込め、人に伝えられるのはすごいしおもしろい。想像したものをそのまま描くのが楽しかった。
・初めて抽象画をやってみて言葉には表せないこと、怒り、悲しみなどを絵で表現できることを実感した。
・表現の仕方は違うのに、どの詩を選んだか伝わるのはすごいと思った。自分なりの表現で表したいと思った。

図２　詩と関連させた大学生の作品鑑賞

図３　抽象的な形や色で表した絵

③第３時
○抽象的な形の表し方の分類を示す
　前時の「詩」からイメージを広げて描いた互いの抽象作品を、「形の表し方」に着目して鑑賞し合った。生徒の作品から、その特徴によって大きく分けて３つに分類できることを紹介した。

A.何となくイメージしながら線や形を描いた（偶然）
B.言葉や具象からイメージを広げ、自分なりの形で表している（単純化）
C.図形など幾何学形態を利用して表している（幾何学）
　自分の形の表し方にどのような特徴があるのかを考えることや今後イメージを形に表現する上で、発想を広げていくことにつなげることを目的に形の表し方を分類して示した。
○主題の創出（言語活動を有効的に活用する）
　教科書の抽象画を鑑賞しながら、目に見えないものを自分だけの形や色で表す抽象画に挑戦することを伝えた。前時は目に見えない「言葉」を表現したが、主題となる自分にとって「目に見えない大切なもの」を深く考えさせるために、自分の内面を見つめ、自分にとって大切な理由やその意味や価値を言葉で表して書き出すようにした。作品完成後に自分の思いを「詩」で表現することから、国語の授業でつくった「感謝」という生徒の素直な気持ちが表現されている詩を紹介した。大切なものにはどのようなものがあるかをいくつか発言させた後、自分に向き合いじっくり考える時間を設けた。大切なものはたくさんあるという生徒と大切なものはそんなに多くはないと主題に悩んでいる生徒もいた。

・色や形で表現してみんなに伝えるというのは難しいことでもあるし、自分を見直す良い機会でもあると思った。
・時間と未来は、今、一番自分が考えていて大切にしているものではないかなと思った。自分らしい絵にしたい。
・挨拶というキーワードでどれくらい大切さが伝えられるかわからないが、表したいものを全面に出せるようにしたい。

図４　形の表し方の分類を示す

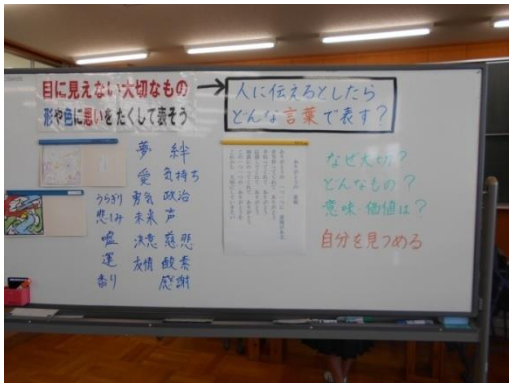


図５　詩を紹介する

④第４時

○色の表し方に着目した鑑賞（大学生の作品鑑賞）

静岡大学、大学院の学生に協力いただき、生徒と同じ題材で作品を制作してもらった。中学生にとっては年齢も近く芸術家の作品より身近に感じられるものであると考えた。主題についても、実際に生徒からあげられたものから選択してもらい、生徒の気持ちを表現しているものに近い参考作品となるようにした。３つの作品の形や色からどんな感じを受けるかという問いに対し、「色が明るいからあたたかい感じがする（主題：居場所）、ビー玉みたいで宇宙に浮いて輝いている感じ（主題：時間）」など、生徒の発言から、形だけでなく色の表し方についても着目しながら作者が表したいことを感じ取っていく鑑賞とした。

- 大学生の色でその作品の温度が伝わってきてすごいと思った。色の表し方で感じ方が変わるなと思った。
- 大学生のスケッチを見て、形は同じでも色を淡くしたり濃くしたりすることで、印象が全然違った。
- 色が濃いと目立って魅力がさらにますと思う。私はうすい色同士を組み合わせて、違う魅力を引き出したい。

図６　第４時（色に着目した鑑賞）

図７　第５時（動きに着目した比較鑑賞）

⑤第５時

○動きの表し方に着目した鑑賞（中学生の作品を比較鑑賞する）

他校の先生が実践された作品（主題は２つとも時間）を比較してそれぞれ形や色から感じたことを発言し合い、構図によっても印象や表したいことが変化することを感じ取れるように鑑賞を行った。

A.「上下に動き出しそう、遠近感がある、背景が空みたい、立体的な形で色も面で変化している。」

B.「色がカラフル、たくさんの色が使われている、いろんな時間を表しているのではないか。」

前時までの鑑賞に比べると、造形要素に着目した意見を積極的に発言できるようになってきた。ここでは、左右対称（シンメトリー）の構図（B）は、動きがなく安定して見えること、大きさや配置を変化させた構図（A）は、動きや遠近感を出すことができるという特徴をあげた。また、色彩においても「色味、明るさ、鮮やかさ」の効果を生かすことにより、表したいことを強調することや「立体感、奥行き」を表現できることにもふれた。鑑賞後、自分のスケッチの動きに着目することで、表したいことやイメージをこれまでにない視点で考え、発想や構想を深めることにつなげていた。

- 色の濃さと大きさで流れ出ているような感じを表現した。香りをどう表すか、出会いをどう表すかは全然違うけど、そのつながりを表せるように工夫したい。
- 遠近感を利用してアイデアを描いてみた。遠近感を出すと動きがもっと出るのだと思った。風の動きで自分の場所も表した。
- 色や形で表してみた。少し遠近感とか流れを出して、立体的にした。次はもっとたくさんの流れを出したい。

⑥第６時

○スケッチの相互鑑賞、構想のまとめ（言語活動を有効的に活用する、対話による深い学び）

本番に使おうと考えているアイデアスケッチをもとに、自己の思いやイメージをどんな形、色、動きを用いて表しているのかを言語化し、班で伝え合った。他者の表現から感じたことについて意見交換しながら、ワークシートに感想やアドバイスを書いて作者に伝えた。また、発想・構想で悩んでいる生徒は、具体的にほしいアドバイスについて意見交換し合い、その後の表現に生かしていた。形や色から他者が感じることも参考にしながら、自己の考えや感じ方も大切にして構想をまとめるよう投げかけた。相互鑑賞を通して、自己の主題や表現意図を更に明確にもつことや他者の表現の工夫にも目を向け、自己の追求したい視点をもとに構想をまとめていった。

・出会いが伝わってきたと言ってくれたので、香りも表すために工夫してみた。どうやったらもっと香りを出せるのかを考えて「出会いと香り」にしたい。
・色をもっと濃く目立たせた方がいいという意見をもらった。だから明暗の差を色の濃さでもっと表していこうと思う。色鉛筆のタッチも考えたい。
・意見を出す中でみんなは感情が心に向かっているように見えると言われ、心から出ている感情という視点から心に向かう感情を表したいと思った。

図８　班での相互鑑賞

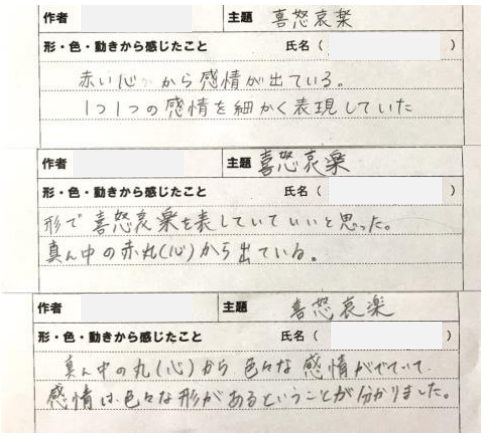


図９　他者からの感想、アドバイス

⑦第７時

○技法の鑑賞（大学院生の制作風景の動画鑑賞）

大学院生の３つの作品の制作風景を鑑賞し、色から伝わるイメージや表現技法から感じたことを全体で鑑賞し合った。描画材（水彩色鉛筆）の特色やその表現の広がりを感じ取れるよう、実際に制作している風景を撮影した動画を見た。生徒の発言では、「A.メインと背景のどちらも濃く塗っているのに、

どっちもすごく目立っている。背景は夕焼けをイメージしているみたい。B.液体が流れているように見える。色を重ねている。C.一つ一つの形は、言葉の一語を表しているのではないか。」など形や色からイメージを広げ、作者の心情を読み取ろうとする力が高まっていきているのを感じた。どのような意図で作者が表現の工夫をしているのかを感じ取り、こだわりをもって表現を追求している様子を鑑賞することによって、生徒は自分の作品に立ち返り、どこをどのように追求していけばより自分の思いが強く表せるかについて試行錯誤しながら表現していた。色から伝わるイメージや立体感を表す塗り方をスケッチブックで試すなど、知識として習得したことをもとに表現における技能も高めながら制作していた。

・今までは喜怒哀楽の感情を形で表そうとしていたが、「時間」という作品を見て感情はハッキリしていない複雑なものだから、重色をして表そうと思った。そしたら複雑さが出てきてよかった。
・大学生の「記憶」の絵がグラデーションだったので、前回の失敗を生かしてグラデーションを塗り直した。濃いから薄いを繰り返すと、とてもきれいな色になったのでよかった。
・表現技法のぼかしを使ってやった。明るい色をほんわか表したかったので、その方法を見つけられてよかった。
・色の濃さを変えてグラデーションを作ってみた。自分という部分をどう強調するといいのかをよく考えて塗った。色々な色に薄い黄色を使うときれいになった。（図 10）

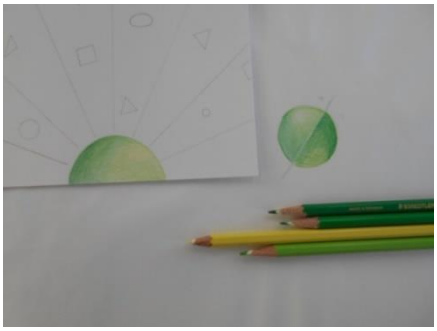


図 10　スケッチブックで試す様子

⑧第８時・９時

○生徒の作品鑑賞（主題と表現意図に着目した鑑賞）

前時までの生徒の制作途中の作品を使って、作者の主題と表現意図を聞き合う鑑賞をした。生徒は自分の思いやイメージと形、色、表現技法がどのように関連しているのかを言語化して明確に語ることができていた。鑑賞後、他の生徒も自分の作品に立ち返り、思いやイメージをどのような意図で表現の工夫につなげるのかを明確にし、どのような視点において表現の追求ができるのかを試行錯誤しながら制作を進めていた。制作していく中で、詩を書くことも意識させ、自分の思いやイメージを言葉で表せるように主題と表現意図を明確にしながら

表現していくように投げかけた。

抽象絵画の主題の創出については、生徒の主題と表現を行き来する思考が一つのパターンではないことがわかった。

A.初めから同じ主題を持ち続け、その表し方を深く考えながら表現していく。

B.偶然できた形や色からイメージを広げたり表現技法を試したりしていく中で、新たな思いやイメージがふくらみ、主題が変化していく。

C.最初に主題が明確にもてなかった生徒が、色々な形や色の表し方を試しながら発想を広げ、思いやイメージを後から意味付けしていく。

抽象表現という表現に多様な広がりがある分野においては、このように偶然できた形や色などからおもしろさや主題を見出していく思考の変容も認める中で、最終的に自己の作品において主題と表現意図を明確にして表すことを大切に指導した。

・グラデーションだけでなく重色も取り入れたいと思った。真ん中にあるぐねぐねの色の塗り方を私なりにいろんなタッチで表現したいと思った。
・たくさんの意味を込めて制作したことや技法など様々な難題にぶつかったけど達成感の一部になった。最後の背景に一番気を使い、黒板の絵を見ながら悩みに悩んだあげくふちどりと薄い色に落ち着いた。抽象画の「読み取る」ということに結びついたと思う。
・背景を水彩でグラデーションみたいにしたくて、描いた上から水を足したり、背景を塗ってから描いたり工夫しながらできた。色も表せるように試し描きをしたい。(図 12)
・みんなのアイデアスケッチをみて、とても工夫しているなと思った。私は、色の重なりを今塗っているので、大変だけど自分が考えたのに少しずつ近づいてきたなと思う。次回水彩を頑張る。
・前回の下描きのバランスが悪かったので直した。色の組み合わせを考えたので、一番良いやつを使おうと思う。

図 11　意図に合った表現を追求する様子

図 12　生徒の作品

⑩第１０時

○詩と絵を関連させて、心情や意図を感じ取る鑑賞（言語活動を有効的に活用する）

詩と絵を関連させながら鑑賞し合い、形、色、構図、技法の工夫にはどのような思いや意味が込められているのかを、自分の感じたことを大切にしながら深く感じ取ることを目標とした。まずは、班の中で一人ずつ作品について解説する。その際、詩を読んでから作者の表現に着目するようにした。発表後、作者に対する質問を積極的にしていた。「どうして背景に黒を使ったのか。その線にはどんな意味があるのか。背景にぼかしを使っているが、どうやって塗ったのか。」など、造形的な要素に着目した様々な質問に対し、作者は、自己の思いや意図を相手に伝わるように一生懸命語っていた。形や色、イメージを通したコミュニケーション力を育成していく上で、生徒の感じたことをもとに生まれる対話がとても重要である。自己の思いを発信し、それを受け止め合って多様な見方・考え方や価値観にふれていくことが、今後の生徒のコミュニケーション力を育んでいくために価値のあることだと感じた。ただ、互いのよいところを探して終わるのではなく、そのよさから何を感じたのか学んだのかを言語化して伝え合う中で、自己のよさや自分らしさを発見しながら新しい価値観を生み出していくこと、豊かな感性を育んでいくことにつながると感じた。

図 13　班ごとの活動の様子

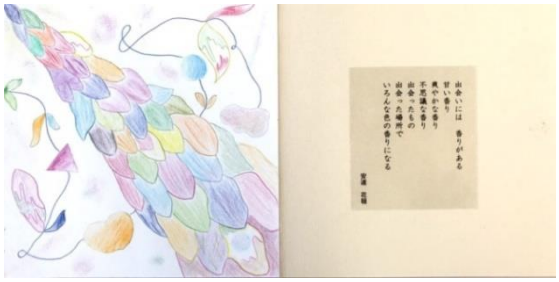
○題材を通した学びを振り返る。（自己の変容、学びを自覚する）

題材を始めた時から作品が完成し鑑賞会を終えるまでの学習を振り返り、自己の変容や学びを振り返る時間

を設けた。これまで毎時間記録してきた構想カードを見直しながら、何を考えて発想や構想を練ってきたのか、どんなことにつまずきを感じ、何をきっかけに解決できたのか、何に一番こだわって表現してきたのかなど、言葉にして書き留めながら振り返った。生徒が何を学びとして自覚しているのかを分析することで、この題材を通して付けたい資質・能力との関連や手立ての実践に対する成果や課題を整理し、今後の授業改善に生かしていきたい。

・自分の思い通りに描くのは難しいことだけど、試してみたりいろんな色を使ったりすることによって自分の表したいことが見つかってくると思った。友達の作品や詩を見ることはとても楽しくて考えることができた。抽象画は人が考えていることを絵にして、それを人が見て作品に込められた思いを伝えることができるとても良い作品だということがわかった。（図 14,a）
・自分の心のまわりには「形のないもの」がたくさんあって、それを表現するのは本当に難しいと思った。形・色・構成と全部自分で決めなければならなくて大変だった。描いていくうちに、これもあれもと追加していきたくなった。一番こだわったのは、背景と奥から流れ出てくる水で、２時間もかかった。そのおかげで、自分の伝えたい気持ち、一番最初に伝えたい「形のないもの」を描くことができてよかった。最後の最後で完成してくれて本当によかった。（図 14,b）
・平面だけの絵を最初は描いていたけど、毎時間たくさんのことを学んで、絵の中でひろがりや重色を考えて良い作品にできたと思う。小さな形一つ一つの色を細かくこだわりをもって描けたということが絵を描くことに対して変化した部分だと思う。今後もこだわりをもって描けるようにしたい。
・初めはアイデアも出なくてよくわからなかったけど、最後は自分の作品の表したいことを言葉で明確にできた。抽象画は自分で想像して一から作り上げなければいけないけど、大学生や仲間の作品のアイデアを見て完成できたのでよかった。他の人の意見を取り入れることも大切だと思った。2-2
・最初はどの抽象画を見ても何を表しているのかなど全くわからなかった。だけど今は自分自身も抽象画を描いてみんなの抽象画を見るとそれぞれ何を表しているのかが想像がついてきて、とても楽しかった。どこを目立たせたいのか、ここは強く伝えたいという部分は大学生の動画などを参考にしたり新たに自分で技法を生み出したりすることができた。（図 14, c ）
・パッと見るとよくわからない絵でも実は深い意味が込められているということがこの授業を通してよく分かった。もし最初の授業に今戻ったらもっとたくさんのイメージを広げられるかもしれないと思った。この制作では遠近感にこだわっていたのでそれを出すためには濃さ大きさなど色々なことを変えていくということが分かった。絵にあった詩を考えるのが難しかった。
・最初はイメージを色や形にすることができなくて悩んでいたけど友達から意見をもらったり参考にしたりしてイメージを表すことができた。グラデーションを使うことで気持ちの強さを表せるということを学んだ。色を混ぜる時に混ぜる順番を変えると結構違うので、美術っておもしろいなと思った。

a



b

c

d

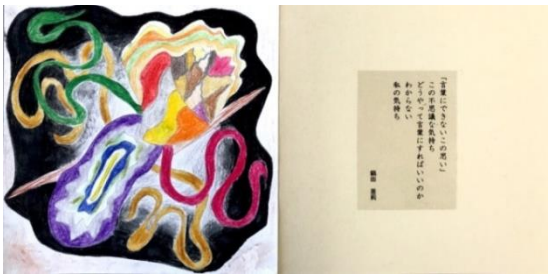


図 14　生徒の作品

図 15　鑑賞会の様子（自分の作品を発表する生徒）

4．授業実践の成果と課題

（1）研究の手立てに対する成果と課題

〇言語活動を有効的に活用する

〇造形的な視点を働かせながら発想・構想広げ、創造的な表現を高める題材展開

〇他者とのかかわりを重視した表現活動と鑑賞活動をつなげる実践

【成果】

・アートカードを使い仲間とかかわり合いながら鑑賞することによって抽象表現に対する関心を高められた。（第１時）

・「詩」という目に見えない言葉からイメージを広げて自由に表す表現活動から入ることで、難しさを感じずに思いのまま表現する楽しさを味わうことができた。（第２時）

・形に着目した鑑賞と分類を示すことは、生徒の発想の手掛かりにはなっていた。特に発想を苦手とする生徒にとっては、幾何学を利用して画面を分割したり、偶然描いてできた形に意味付けしていたりしていく生徒もいた。（第３時）（資料 1-a,b）

・大学生の作品鑑賞、制作風景の鑑賞を活用したことにより、生徒の発想や構想の広がりや深まり、表現を高めることにつながった。技法を試すことによって発想を広げる生徒もいた。(資料 1-c)

参考作品のイメージに引っ張られる面もあったが、自分の中の発想・構想にとどまらず、多様な表現や価値観にふれることは生徒の感性や表現の高まりにおいて大変効果があったと感じる。大学生の主題や表現意図、創造的な工夫を感じ取る鑑賞における能力の高まり、生徒それぞれが感じ取ったことを自己の表現にどう生かすのかを試行錯誤し選択していくこと、自己の主題をどのように表したいのかを深く考え、追求したいことを強く抱いて制作を進める関心・意欲の面での影響を大きく受けていたと感じる。

・形や色、構図など造形要素に着目した鑑賞を取り入れたことにより、どのような思考で発想や構想を広げたり深めたりしているのかを生徒が自覚し、教員が生徒の思考の変容を把握することができた。（資料２）

（資料１：発想を苦手とする生徒の変容）

a.具象から抽象への表現を難しいと感じていた生徒

b.感情を抽象的な形にどう表すのか悩んでいた生徒

c.主題が創出できなかったが、表現技法を試していた生徒

a　　b

c

図 16　生徒のアイデスケッチ

（資料２：造形的な視点をもとに思考している様子、アイデアスケッチの変容）

a.喜びと悲しみの感情を幾何学を利用して発想する。（幾何学の形が多い）

b.明日への喜びや不安を単純化して表し、動きをつけていく。

c.単純化を使って感情の形を表し、色から伝わる感情にこだわる。

d.単純化で人とのつながりを表し、主題を深めながら遠近感や立体感を表現していく。

e.表に出ていく感情を表すために、動きにこだわって表現していく。

f.出会いと別れのイメージを強く抱き、形、色、動きにおいて追求していく。

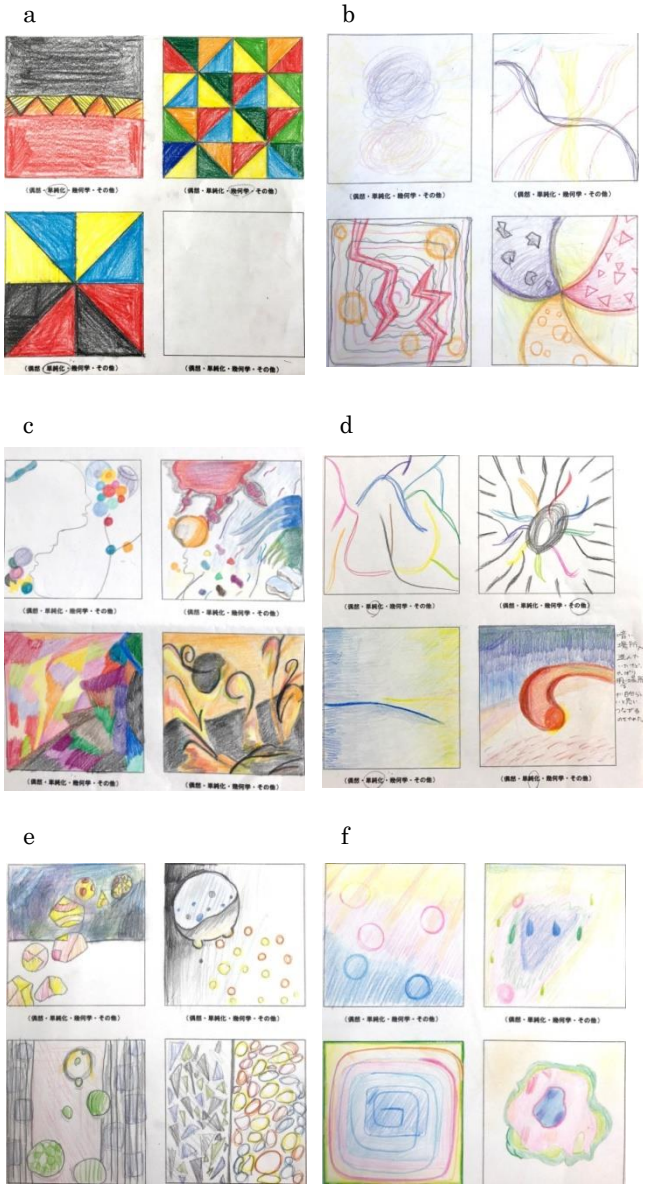


図 17　生徒のアイデアスケッチ

【課題】

・抽象的な形に表す際、３つの分類（偶然、単純化、幾何学）を示したが、生徒にとって知識として習得していくのは難しかった。最初は偶然を利用して発想を練っていく生徒が多かったが、主題が明確になっていくと共に、イメージを自分なりの形にしたり具象を単純化して形に表したりする生徒もいた。単純化と幾何学を組み合わせて表現している生徒もいるため、はっきりとした分類は難しいと感じた。

・主題を考えた後、イメージを形にすることに難しさを感じていた生徒もいた。単純化という分類を示す上で、イメージを自分なりの形に置き換える、強調や省略をして単純化する練習を踏んでもよかったと感じる。

・生徒の発達段階に応じた題材設定の在り方について、今後も研究していくことが必要である。生徒の実態にもよるが、女子生徒の方が自己の内面を深く見つめて主題を生み出すことができていたように感じる。男子生徒においては、感情（喜怒哀楽）というものが多く、自己の思いと関連させながら深く掘り下げて主題を言語化することができる生徒は少なかった。

（２）実践研究を通して

「目に見えない大切なもの」を自分なりの色や形で表現する題材は、生徒にとって自己理解や他者理解に大きくつながったものだと感じる。美術を通して自己表現することに対し、描くことや作ることが得意ではない生徒は苦手意識をもっている。しかし、自分なりの色や形で生き生きと表す抽象表現の体験は、一人一人の個性が大きく表れ、生徒にとって自分なりの表現ができたという達成感や喜びにつながったのではないかと感じている。

これまでの実践では、生徒同士のかかわり合い、対話という視点において積極的な実践ができていなかった。その理由は、題材における造形的な価値や身に付けたい資質・能力についてなど、美術教員としての題材を研究する力が不十分であったという課題があげられる。今回実践した抽象画について考えると、題材を通して生徒にどのような力を育成したいのか、またその力がこれからの時代を生きていく生徒にとってどのような価値があるのかという教員の考えや思いがあってこそ、生徒にとっての価値ある学び、深い学びへとつながるであろう。ただ、生徒同士がかかわり合い、対話すればいいというわけではなく、色・形・イメージなど造形要素に着目したコミュニケーション力を育成していくことを目的とした活動を意図的に実践していくことが大切だということを今回の実践を通して感じた。

他者とかかわる際、言語活動は自己の思いを伝え合う大切な手段である。本題材では、自己の内面を深く見つめ主題を生み出すことを重視している。自己の思いやイメージを言葉にして書きとめ、可視化しておくことで、自己の思いの変容や深まりを自覚すること、また、その思いを他者に説明する際に、考えを整理して伝えることができたと感じる。言語化することを苦手とする生徒に対する支援として、生徒の思いを引き出していけるよう丁寧な指導を大切にした。造形要素に着目し、自分なりの言葉にしていく経験を重ねていくことにより、自分の思いが伝えられたという喜びや達成感につながるのだと思う。言語活動を有効的に活用することは、主題の創出や表現の追求、生徒同士のかかわり合いや対話による深い学びなどにおいて大変重要な手立てとなることを学んだ。

○参考文献

＊文部科学省『中学校学習指導要領〈平成 29 年告示〉解説　美術編』日本文教出版、2018